転生

高橋信次

関西本部の研修会以来、私の転生について疑問をいだく向きがみられ、これについての手紙も届いている。そこで今日は、これについて答えてみたいと思う。

まず、人の心について述べてみよう。

人の心は私が日頃述べているように、本来は、丸く、豊かに、そうして、柔らかな黄金色に輝いている。人の意識活動は、この心の働きによって為されている。普通の見方は、頭脳が働くとみられている。心もまた頭脳の作用と考えられている。しかし、真実は、心と頭脳は別で、心は私たちの五体のちょうど、胸の当たりに位置し作用している。感動で五体が揺れるとき、私たちの感情は頭からではなく、胸の当たりから起こっているはずである。こうした経験は、まず十人のうち十人が経験していると思う。

したがって経験的には、この点を否定できる人はいないと思う。霊視でこれを見ると、心は胸のあたりに、はっきりと映るのである。

さて、次に、人の心は肉眼でとらえられるあの太陽の延長されたものと考えればいいだろう。太陽は万物を生かす慈悲と愛の塊りであり、私たちの心も、慈愛に満ちれば、丸く、豊かな太陽と同じように輝くものである。

あの世にはさまざまな世界がある。大きく分けて、宇宙界から幽界の最低段階の地獄まで、九段階に分けられよう。そうしてこの段階には、あの世の太陽が輝いている。段

階によって、その太陽の輝きは異なる。つまり、あの世の太陽の輝きは、人の心の輝きに正比例して存在しているわけだ。

太陽界という世界は、宇宙界の一つの現象として存在しているが、太陽界はこの世とあの世のあらゆる生命エネルギーを放射し、生かしつづける世界である。その太陽界には、ブッタを中心に、イエス、モーゼがいる。いずれも本体である。そうして時に応じて、この地上に現われ、衆生を救済する。ブッタ、イエス、モーゼは、太陽界という世界では一つの光となって光を放っている。地上に形となって現われるときは、これまでは三つの個性ある姿となって機能してきた。三つの機能とは、文証、理証、現証の働きである。

太陽界のもう一面の姿は、宇宙界から直結した大神霊の世界でもある。宇宙界は、それ自体、大神霊の世界であるが、太陽界は、それを映した光として現象化された世界なのである。それゆえ、太陽界は、それ自身、大神霊の現われの世界といえるわけだ。

人の心と、あの世の世界は、常に等しい関係におかれ、太陽界は、あの世とこの世に光を与えつづける大神霊の現われの姿とみていいのである。三次元的には、私たちの頭上に輝く太陽を指すのである。

そこで、太陽界の一部であるブッタの転生が現われれば、日本に四回生命を持ったということになろうし、大神霊の延長としての太陽界それ自体の光が人格として現われるとすれば、今回が初めてということになってくる。

なぜ、このようなかつて見ない現象が起こっているかといえば、物質科学の発展によって、地球上の危機を迎えているからである。そうして現代の地上の混乱は、仏国土建

設の基礎となるか、あるいは反対に、人類滅亡の引き金となるかの瀬戸際に立っているのである。

人類は過去六回におよぶ危機を迎え今日に至っているが、今回の危機は最大である。米・ソを頂点とする原水爆兵器をはじめとした人類殺戮兵器の量は、四十億の民を数回皆殺しにしても、なお余る保有量を占めている。危機の地上を仏国土の基礎としなければならないのだ。その基礎は、すでに実在界で計画され、それが現在、地上で具体化されつつあるのである。

こうみてくると、正法を学んでいる者には、大よその見当がついたと思われる。

次に、太陽界と如来界の関係であるが、この二界の連絡をミカエル大天使が果たしている。ミカエルは、いわば如来界の天使長としての役割を担っている。ミカエル大天使は男性である。

さて、そこで、ここで断っておきたいが、如来界でも、ある段階以上になると、肉体を消滅させたり、現わしたりする自在な力を持っている。太陽界のイエスは十字架の人となった後、その肉体を消滅させ、復活しているし、また、モーゼも肉体を消している。エリヤもそうであった。また、如来界のブッタの分身の方も、私の前に現われると、私の知らぬ間にその姿を消してしまう。

このように、あの世の大指導霊は、現象界では自在にその身を変化させることが可能なのである。したがって、ミカエルにあっては、この地上における男女の区別は問題でなく、時に応じて、自在に変化させ、現われるのである。現象面だけをとらえ、すべてを判断しようとすると、そこに無理が生じ、理解できない面が出てきてしまう。そこ

で、私は、常日頃、会員に求めている。

人の転生を理解するには、まず、自分の転生を知って欲しいと。

自分の転生がはっきり理解できないと、人の転生も理解できないからである。その理由は、人の潜在意識は、皆一つにつながっており、自分の潜在された意識がひもとかれないと、人の心も理解されてこないからだ。

自分の転生がわからずに、人の転生や現象だけに心を奪われ、それに翻弄されると、人の心の真実がわからないばかりか、正法さえも否定するということになってくる。

私は、よく会員諸氏に申し上げている。霊的に「見る」、「聞く」、「語る」ことができないと、どうしても心が不安定になる、と。この場合の「見る」とは、霊視を意味する。「聞く」とは、守護・指導霊の言葉である。「語る」とは、過去世の言葉を語ることである。この三つがそろわないと、人の心がわからないし、私の心がどんな状態にあるかも不明になってくる。

ところが、自分の心が未開発のままで、人をあれこれ詮索すると、話は、いつも堂々めぐりとなり、四次元以上の世界、つまり、人間の真実の姿がどうしてもつかめないことになるのである。したがって、心は常に不安定となり、曲解、独善に陥ってくる。

不動心は、容易に得られないことになろう。

また、人にはそれぞれ器というものがあって、器以上のものを求めようとすると、かえって心を不安定にさせ、せっかくの霊道も魔の支配下におかれてしまう。正法の根本的態度は謙虚さにある。謙虚を失うと、ものを客観的に見ることができなくなり、独善に流れれば自分が苦しくなってくる。

また、人にはそれぞれ役割というものがあって、今生のその役割を十全に果たすことによってのみ、人はいきいきと生きられる。

霊道、器、役割――。

こうした過程を通して、人は、真の安らぎと智慧の湧現が体験でき、仏国土建設の柱となることが可能となる。

また、これらを含めて、正法に一貫して流れる規範は、八正道という物差しであり、人はこのフィルターを通さないと、偏見と迷いから容易に脱皮できない。

このように、人の心、あの世の世界、過去世、転生、霊道などの正しい認識は、まず自分自身が、正道に適った生活を送ることである。自分自身が不明のままで、既成の知識だけで判断すると独善に陥る。

もし私が説明する霊的な面がどうしても理解できないとすれば、正道の尺度をもって、私の三次元的生活を見てもらえばよい。そうして、そのうえで判断を下しても結構である。三次元は、あの世の全部を投映しているとはいえないが、しかし、三次元の理解が深まると、あの世を類推的に理解することが可能となってくるからである。

しかし、もっとも理想は、アラハンの境地に自分を置くことである。そうすることによって、安心と智慧が生まれ、守護・指導霊のたしかな導きがあって、みだりに心を動かすことがなくなるものである。

正法は、誰のためでもない。各人のものである。自分を愛する者は、人をも愛することができる。まず、自分自身が身をもって、真実か否かを体験して欲しいものである。

（人道科学研修所長）

このたび、「GLA会員の誓い」と「会員心得」を整備、まとめました。熟読のうえ、しっかり身につけていただきたいと思います。　1976年3月　GLA総合本部

GLA会員の誓い

① 神の子である我らは、神の意を体し調和ある地上界を築いてゆきます。
② 八正道を生活の規準に、己に厳しく、人には寛容の豊かな心を育てます。
③ 縁ある一切のものに感謝と報恩の心を忘れず、笑顔をもって物事に接してゆきます。
④ 守護・指導霊の導きに対しては心から感謝し、いやしくもこれを自己保存の道具とはいたしません。
⑤ 慈悲と愛の生活を実践し、魂の先祖の冥福を祈り、先祖の正しき意思を未来につないでゆきます。

GLA会員心得

① 人間の目的は、己を悟り、慈悲の心と愛の行為に満ちた調和の仏国土を湧現することにある。
己を悟ることは、反省という止観を通して達成される。それは同志的な集い、環境の中でよりよく促進される。
② GLAはこの趣旨にそって運営される同志的な団体組織である。すなわち正法神理を己のものとし、具体的に、実践的にこれを育み、信頼、友好、啓発、相互扶助の愛の理念を実現する名誉ある修行場であり、神より与えられたものである。
③ 人はややもすると、個の悟りのみを願って虚無主義、独善に陥り、反対に、愛に生きようとして五官に翻弄される。正法は、この両面の調和の中に存在し、決して一方に片寄ったものではない。GLAはこの両面を相補いながら仏国土達成をめざす同志的集団であり、会員はすべからく、希望と、勇気と、誇りに満たされるものである。
④ 人生はこれでよしとする限界はないし、修行のプロセスは常についてまわる。八正道を理解し始めると己の心をしばり、失敗や過失を恐れる者がある。しかし、正道は自由と寛容の中に生き、拘束と緊張を嫌うものである。失敗は成功の基礎であり、反省のよき材料なので、事に当っては勇気を持って接すること。また、成功のみを願うと、心のうちに欲望の芽を育て、正道から外れてくる。会員はすべからく自戒すべし。
⑤ 会員は社会の中にあって、常に反省と慈愛の調和を忘れず、人々の範となり、教導に心がける。
⑥ 会員は、友愛と進歩と正道のかなめである会の維持に、協力、協賛する者をいう。